

文章表現

室岡 一郎

1. 文章表現プログラムの概要

はじめに、2015年度現在の文章表現プログラムの概要を一覧で示しておく、表1のとおりだ。なお、表中の「随筆系文章」とは一般的にいう「作文」のことであり、「論文系文章」とは「小論文」や「レポート」を含めた広義の論理的文章を指している。

表1 文章表現科目の概要(2015年度現在)

文章表現Ⅰ	主たる目標：各種の文章に通底する基礎を身につける。
	履修条件等：全学一年次の必修科目、指定クラスで受講(定員25名/クラス)
	クラス数：春学期51(履修者数：1221)、秋学期45(履修者数：1091)
	主な内容：受動的な感想文を脱し、発信する姿勢を身につける。随筆系文章を中心に具体的かつ正確に伝える訓練を積む。また、論文系文章の基本を学ぶ。
文章表現Ⅱ	主たる目標：文章の完成度を高める。各種の文章に応用する。
	履修条件等：全学一年次科目、先修条件「文章表現Ⅰ」、抽選(定員20名/クラス)
	クラス数：春学期9(履修者数：139)、秋学期10(履修者数：169)
	主な内容：随筆系文章と論文系文章の基礎を再確認しつつ、それらの完成度を高める。実用文への応用として、エントリーシートや手紙の基本を学ぶ。
文章構成法	主たる目標：論の構築、論文の書きかたを身につける。論理的思考力を錬成する。
	履修条件等：全学二年度科目、先修条件なし、抽選(定員20名/クラス)
	クラス数：春学期5(履修者数：55)、秋学期4(履修者数：26)
	主な内容：論の構築から論文の基本書式まで、論文の書きかたを総合的に学ぶ。

「文章表現Ⅰ」は全学一年次の必修科目(コア科目)であり、文章によるコミュニケーションの基礎を学ぶ。「文章表現Ⅱ」は、いわば「中級・上級編」あるいは「応用編」にあたる。「文章表現Ⅰ」と「文章表現Ⅱ」が各種の文章によるコミュニケーション能力を初歩から段階的に向上させることを目標としているのにたいして、「文章構成法」は「論の組み立てかた」と「論文の書きかた」に特化した科目である。「文章構成法」には先修条件をつけ

ていないが、二年次科目であるため、受講生は少なくとも一年次の必修科目である「文章表現Ⅰ」を修了していることが想定されている。各科目とも週一回、一学期に十五回の授業をおこない、修了により二単位を認定する。

いずれの科目においても実践的学習に重点をおき、一学期に少なくとも四本ないし五本の課題作を執筆し、教員が個別に添削指導をおこなう。また、学生が互いの作品を読み、受信者の目で文章を検討する機会も設けている（「相互講評」と呼んでいる）。発信と受信を繰り返すことで、「伝わる文章」の要諦を体得させることがねらいである。

添削指導もおこなうため、三科目とも定員が二十名ないし二十五名の少人数クラスとなっており、「文章表現Ⅰ」は全学必修科目であることもあって、クラス数は多い。それを専任教員二名、非常勤教員十七名が分担し、専任教員のうち一名（室岡）が科目コーディネーターとして三科目の管理運営の現場を統括している。新聞記者、編集者、小説家、ライターなどの、実社会での多彩な執筆経験を積んできた教員が指導にあたっていることも特徴の一つであり、その意味でも、まさに実践的な指導がおこなわれている。

三科目とも、いわゆる「教科書」は使用していない。そもそも「正解」が一つではない文章表現教育において、あまりにもマニュアル的で画一的なスキルを教えこむことには弊害があるからであり、多彩な執筆経験をもつ担当教員の持ち味を活かした授業を重視しているからでもある。「文章表現Ⅰ」は全学必修科目であるため、共通シラバスに記載された事項は守りつつ、教員が個々の教案を工夫している。選択科目である「文章表現Ⅱ」においては、「文章表現Ⅰ」に比べてより自由に、各教員の個性（たとえば新聞記者ならば新聞記者としての経験や能力）を活かした授業を展開している。そうすることで、たとえばエッセイやコラムのような文章をもっと練習したい、あるいは、論文系の文章に重点をおいたクラスで学びたいといった学生の多様なニーズにも対応しやすくなっている。「文章構成法」は「論の構築」や「論文の書きかた」に特化した授業であるためクラスによる大きな差異はでにくいだが、やはり、教案や教材は各教員が工夫している。ちなみに書きそえると、サービス・ラーニングをとりいれたクラスも一つ用意されており、そのクラスでは授業時間外に社会奉仕活動に参加し、それを題材にして最終課題論文を書く。

個々の教員が授業を工夫しているとはいえ、文章表現プログラムとしての統一性や整合性は不可欠であり、学生の抱える問題や、それに応じた対策を教員が共有することも重要だ。とくに「文章表現Ⅰ」は全学必修科目であるから、内容や評価方法に大きなばらつきがあってはならない。そのため、春学期と秋学期の間にそれぞれ一回ずつ、年二回の担当教員研修会を開催している。また、学而館三階の文章表現スタッフルーム（教員の控え室）には教材提供コーナーを設置し、常時、教案や教材を共有できるようになっている。また、スタッフルームでは、教室での学生の反応や学生作品についての教員同士の意見交換

も活発におこなわれている。

具体的な授業内容を把握する参考に、「文章表現Ⅰ」の授業計画例を表2に記しておく。表には記載がないが、細かい表現の問題(たとえば重複表現や常套表現など)は、添削を返却する際に、学生の文章に多くみられる問題をいくつかとりあげて解説している。

表2 「文章表現Ⅰ」の授業計画(室岡クラスの一例)

回	主な内容	演習
1	文章表現を学ぶ意義/受講上の注意/自己診断アンケート	課題作①を書く
2	課題作①の返却と講評/添削の活用方法/表記の基本ルール	
3	読み手の存在/「話す」と「書く」の差異/中心の明瞭な文章	課題作②を書く
4	課題作②の返却と講評/説明と描写/具体的に書くことの重要性	
5	構成の基本/書き出しと結びの工夫	課題作③を書く
6	改行と段落の効果/読み手の視点での文章の点検	課題作③の相互講評
7	課題作③の返却と講評/句読点の機能と効果/簡潔な一文/執筆準備の方法(ブレインストーミング、イメージマップ、アウトラインほか)	
8	執筆準備を整えてから書いてみる	課題作④を書く
9	話題を組みあわせる一つの方法(共通点と相違点を発見する)	課題作④の相互講評
10	課題作④の返却と講評/論文の基本1:作文と論文との差異	
11	論文の基本2:論文の要素/論文の基本形/著作権と引用のルール	
12	論文の基本3:アウトラインを作成してミニ論文を書く	課題作⑤を書く
13	課題作⑤の返却と講評/論文系文章の補足説明/小まとめ	
14	締めくくりの課題作品の執筆/文章表現オリジナルアンケートの実施	課題作⑥を書く
15	課題作⑥の返却と講評/まとめの講義/授業評価アンケートの実施	

2. 文章表現プログラムの成果

授業を通して学生の文章力がどのように変化するか、それを端的に数値で示すようなことは困難である。文章力は、書き手たる人間の総合力であり、文章の内容の判定を含めればなおのこと、成果を数値的に示すことは困難である。総合力だからこそ学生の文章力は多種多様であり、画一的な成果を目標とするのではなく、多様性によりそった指導により、学生をそれぞれの到達点へと導くことが重要であるともいえる。

学生によりそった指導のなかで、もちろん、教員は学生の能力の変化を実感している。

その実感は添削指導によるところが大きい。そのような実感を成果の実例として示すとしたら、多数の作例を挙げて解説することになるが、本稿ではその余裕がない。ここでは、いくつかのアンケートの結果を紹介しておこう。いずれも学生の自己判定という意味では客観性に乏しいが、成果の一端を知る参考にはなるだろう。

まず、受講前の学生は自分の文章力をどのようにとらえているだろうか。私のクラスでは初回授業で、書くことについての自己診断アンケートを実施している。そこには「苦手で嫌い」「自分でも書いていることがわからなくなり、途中から話がずれる」「小学生の文章みたいだと言われる」「長い文章は書けない」「なにをどう書けばよいか、まったくわからない」といった回答が並び、大半の学生が困難や不安を抱えていることがわかる。「うまくはないが、書くことは好き」といった、謙遜まじりの自信をうかがわせる回答もみられるが、残念ながら少数である。

受講後の自己診断はどうだろうか。「文章表現Ⅰ」と「文章表現Ⅱ」では学期末に科目独自のアンケートを実施しているが、「自分の文章の問題点がわかった」「学んだことは、将来、必ず役に立つと思う」「まだうまくは書けないが、書くことが嫌ではなくなった」といった回答が並ぶ。全学で実施している授業評価アンケートの自由記述欄の回答も同様だ。「文章表現Ⅰ」の独自アンケートには、身についたこと、あるいは理解したことに○をつける質問もあるが、2015年度春学期は次のような結果だった(丸括弧内が○の割合)。
①原稿用紙の使いかた(91%)、②漢字や言葉の知識(78%)、③改行と段落の使いかた(86%)、④簡潔な文を使って書くこと(75%)、⑤具体的に書くこと(74%)、⑦作文と論文の違い(72%)、⑧論理的文章の基本的な書きかた(71%)、⑨書くのが苦手ではなくなった、あるいは、書く力がついた(86%)。

また、全学の新2年生を対象とした大学生基礎力調査(ベネッセiキャリア)には、桜美林大学が独自に設定した質問の一つに「この一年間で成長を感じる能力」について選択式で回答する質問がある。科目固有の成果を示すものではないが、2015年3月30日に実施された調査において「文章作成能力」を選んだ学生は、リベラルアーツ学群で22.2%、ビジネスマネジメント学群で16.3%、健康福祉学群で19.8%、芸術文化学群で17.2%、となっており、いずれの学群でも上位3位内に入っている。

3. 文章表現プログラムの存在意義、今後のありかた

書くことはコミュニケーションの基本となる重要な行為の一つであり、その根底には「考える」という行為がある。大学での学習や就職活動において「書く力」や「考える力」が

不可欠であることはいうまでもなく、さらには、その後の仕事や社会生活において、その重要性はさらに高まる。全国の大学において学生の「書く力」や「考える力」の低下傾向が危惧されるなか、その問題と正面から向きあうべく、文章表現プログラムが始まったのは2000年のことであった。文章表現プログラムの存在意義自体は、当時と変わってはいない。むしろ、それは高まっているといってもよい。

先にも記したとおり、「書くのは苦手嫌い」「どう書けばよいかわからない」と自己申告する学生は後を絶たず、むしろ増加している印象さえある。一定量の文章を書けたとしても、日常会話のような、あまりにも雑な表現が連なっていたり、情報の欠落がみられたりする。表現はそれなりに整っていたとしても、どこかで見聞きしたようなステレオタイプの内容ばかりということもある。大多数の学生の文章がそのような傾向にあり、そのような状態では大学での学習にも支障があるだろうし、就職活動でつまずくおそれもある。卒業後の仕事においても心配だ。

「文章表現Ⅰ」の初回授業では、「学生生活においても大学卒業後の社会生活においても重要な基礎的能力の一つを再点検し、弱点があればそれを克服するためにこの授業を活用してほしい」と学生に伝えている。弱点を知り、その克服への一步を踏みだすならば、早いに越したことはない。さらにいえば、一朝一夕には克服できない弱点もあり、表現方法や内容を磨きあげることに終わりはない。「文章表現Ⅰ」の授業だけでは決して充分ではなく、時間はいくらあっても足りないぐらいだ。

2016年度よりグローバル・コミュニケーション学群が新設され、同学群ではコア科目を使用しないことになっている。同学群生にとっては「文章表現Ⅰ」も必修科目ではなくなったわけだが、その理由は、言語表現は同学群の専門領域であるため、むしろ、言語表現に関する独自の科目やプログラムがあってしかるべきである、とのことのようなのである。そして、この動きを機に、学群ごとの独自の基礎教育を構築しなおす方向での全学的な改革が進められようとしている。

文章表現プログラムもこの動きのなかで再検討されることになるが、すでに「文章表現Ⅰ」を必修科目から外すことを決めたグローバル・コミュニケーション学群は除くとしても、ほかの学群については、今後も「文章表現Ⅰ」を必修科目として存続させたほうがよいのではないだろうか。「文章表現Ⅰ」の内容はすべての文章に通底する「基礎の基礎」と呼ぶべきものであり、すべての学生が、まずは「文章表現Ⅰ」を通して自分の文章力を点検することが望ましい。とくに書くことが苦手な学生には、「文章表現Ⅰ」のような科目が必要だろう。各学群が「文章表現Ⅰ」に相当する新科目を独自に開講して運営する方法も考えられるが、そうするのであれば、従来どおりに「文章表現Ⅰ」を全学的に提供する科目として一括して管理運営するほうが、多くの面(たとえば内容の精査や統一、非常勤

講師の手配など)で効率的ではないだろうか。

「文章表現Ⅱ」と「文章構成法」のような科目については、学群ごとに取捨選択、カスタマイズする方法もあるかもしれない。「文章表現Ⅰ」で基礎を押さえたら、学群ごとに特化した新たな文章表現科目を必要に応じて接続することも考えられる。

ただし、近年の学生の文章力の低下をみると、基礎固めにこれまで以上の時間をかけなければならなくなる可能性が高い。文章表現プログラムも含めた基礎教育の改革の肝は、むしろ、そのあたりにあるのではないか、とも思われる。